青年と少女のマルチプル・オンライン ―アイナ・アンダレイ―

グラハムさんとピンクマ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「あのガンダムのプレイヤーに追いついてみたい、、、！」

勝利にしか興味のなかったプレイヤー、『フェン』がとあるプレイヤーと出会い成長していく、もう1人の主人公の話。

目次

第１話「ＧＮ―Ｘとガンダム」―― 1
第２話「幼馴染みとマドンナと」―― 5
第３話「求め過ぎて」―― 9
第４話「勝ちたければ」―― 14

第1話「ＧＮ―Ｘとガンダム」

宇宙、隕石群にて…

パシュン！パシュン！

動きに注意しなければならない隕石群の中で、１機のデスティニーベースのガンダムと、１機のオリジナル太陽炉搭載型ＧＮ―Ｘが戦闘している。

????「今日も勝利数を更新してやる！」

ＧＮ―ＸのプレイヤーはＧＮビームライフルを数発撃った後にＧＮビームサーベルを取り出す。

青年　「、、、っ」

接近戦に対応する為、ガンダムはＧＮロングブレイドで対抗した。

ジリジリ…

????「武器を取り出す速度が速い、、、うぉっ！」

ガツンッ！

ガンダムはＧＮ―Ｘを蹴りで突き放し、シールドをＧＮ―Ｘめがけて投擲した。

????「くっ、、、」

シールドをギリギリ捉えたＧＮ―ＸはＧＮシールドでなんとか防ぐ。

ビュゥゥゥゥ！

すると立て続けにガンダムがアロンダイトを手に取り、ＧＮ―Ｘをめがけて突進する。

????「速すぎる、、、！」

ザンッ、、、！

ガンダムはスーパーモード、ＧＮバーニア、光の翼の合せ技でＧＮ―ＸをＧＮドライブごと貫いた。

????「なんて力だ、、、」

ドオンッ！

ロビー…

ＧＮ―Ｘのプレイヤーがロビーに戻ると、１人の女が駆け寄ってきた。

「お疲れ、負けてやんの」

????

⊠ミア⊠、幼馴染みで同じ学校に通っている。偶にからかってくるような奴だ。

????

「うるせぇ、、。あ～あ、勝率下がっちゃうな」

ミア　「このゲームはどんなゲーマーでも勝率９０％なんてありえないんだから気にすることないって」

????

「どんなフォローだ」

そんな掛け合いをしていると、偶然２人のプレイヤーの会話が耳に入ってきた。そのプレイヤーの外見はオレンジでよく目立つ。

俺らと同い年だろうか。

少女　「お疲れ様♪久しぶりのガンブレの調子はどう？」

青年　「う～ん、まだ鈍ってる」

聞き耳を立てていると、ミアが再び話しかけてきた。

ミア　「あの２人が気になるの？」

フェン「あ、あぁ。あのオレンジのコートの人、さっきのガンダムのプレイヤーなのかなって」

ミア　「そうみたいだよ」

フェン「知ってたのか？」

ミア　「うん。確か前にランキング表に載ってたから。それに、、、」

ミアはしばらく黙りだす。

フェン「それになんだよ？」

ミア　「、、あの人、２、３日ほど前血まみれで女の子に担がれながら帰ってきたの」

それを聞いたフェンは動揺をする。

フェン「は、はぁ？どこで？」

ミア　「私が気分転換にＳＡＯにログインして、その街の中で。今は眼帯してるなんて思いもしなかったけど、、」

フェン「、、、」
ミアに説明された後、フェンはしばらくその青年から目が離せなかった。

数時間後…

フェンとミアはロビーから外へ出て、自分達のホーム前へと戻ってきた。
ミア「フェンはこれで落ちる？」
フェン「いや、少しショップを見てから落ちる」
ミア「そっか、じゃあまた明日学校で。またね」
フェン「あぁ、また明日」
挨拶を交わし、ミアはログアウトした。それと同時にフェンはショップへと歩きだす。
フェン「さて、強化パーツ何か売って、、、」
????「お、、、っ」
フェンが曲がり角を曲がると、他のプレイヤーと衝突した。
フェン「うわっと、すっすいません！」
????「いや、大丈夫！」
フェン「って貴方は、、、」
オレンジのコートに左目の眼帯、間違いない、さっきのガンダムのプレイヤーだ。
青年「ん？あ～、あのＧＮ―Ｘの！」
フェン「はい、先程は対戦ありがとうございます！」
青年「敬語なんていらないよ。俺にはね」
フェン「そう、、、か」
以外だ、無愛そうなイメージがあったけど凄く優しい。
青年「あのＧＮ―Ｘ凄いかっこ良かったよ！」
フェン「ありがとう。でも黒のＧＮ―ＸⅢにモンテーロ腕とアヴァランチエクシア背を付けただけだけど」
青年「それでも素組みとは見違えてていいよ、俺もＧＮ―Ｘのカ

スタム好きだし」
フェン「そうなのか」
フェンが気が合いそうと思っていると、1人の少女の声が聞こえてきた。
少女「グラハム～行くよ～！」
あの様子だと、フェンがいることに気づいてない。てかこの人の名前グラハムって言うんだ。
グラハム「俺はそろそろ行くよ。またな」
フェン「あぁ、また戦う時に」
グラハム「楽しみにしてるよ」
そう言ってグラハムは道路の向こう側にいる1人の少女の元へ向かった。
フェン「よし、やってやる、、」
フェンはショップへ向かいながら決意した。
フェン「グラハム、、あのガンダムのプレイヤーに追いついてみたい、、、！」
今までにない闘争心を抱き、フェンは高みへと目指す。

第2話「幼馴染みとマドンナと」

翌日、学校にて・・・

玲は昨日のバトルのことを考えながら昼休みを過ごしていた。

玲（あの人の機体、スーパーモードと光の翼を上手いこと組み合わせていた。俺も何か融合させたものを作るべきか？あぁ、考えてる内にどんどん眠く、、）

???「なんで黒にしてきたの？」

???「う～ん変かな？」

うとうとして机にうつ伏せようとすると、後ろから話し声が聞こえて来た。多分、織月兄妹と本多さんかな？

織月さん「変ではないと思うけど、普通は白色の眼帯だよね」

明日人「でも、黒の方が違和感はないと思うんだけど」

本多「確かにそうだね」

玲（眼帯の話か。そういや何で明日人は今日眼帯を付けてきたんだろ？しかもグラハムと同じ左、、）

???「玲～」

玲「ひっ!?」

突如誰かが声をかけてきた。ふと顔を上げるといつもの女だった。

???「びっくりしすぎでしょ」

玲「なんだ、愛奈か。どうした？」

愛奈『『なんだ』って君ねぇ、、っとそうだ、今日の帰り時間ある？」

玲「あぁ、一応空いてる」

愛奈「良かった。なら、一緒にガンプラ中古店に行かない？珍しいジャンク品巡りがしたいから」

愛奈は、自分が暇であればいつも俺を誘って何かをする。呆れるような時もあるが、退屈はしない。

玲「丁度いい、俺も何かしら探したかったんだ」

愛奈「やった♪あ、部活仲間の子も連れてきて大丈夫？」

玲「大丈夫大丈夫、問題なし」

愛奈「分かった、またあとでね！」
約束を交わし、愛奈は自分の席へ戻った。

放課後、公園にて…

学校が終わり、玲は学校前の公園で愛奈を待っていた。同じクラスなので一緒に教室を出れば良かったのだが、部活のスケジュール表を貰いに職員室へ寄るらしく、先に公園で待機させてもらったのだ。
玲（あのガンダムに勝つには、あれ以上の機動力か特殊武装が必要か。いっそのことGNドライブを直列にしてみても、、）
すると、玲はふと思った。
玲（そういや、なんで俺はグラハムさんに執着するんだ？他にも強いガンダムは沢山いるのにどうして）
愛奈「お待たせ！」
我に返ると、目の前に愛奈が立っていた。
玲「おぅ、それじゃあ、」
早速行こうかとすると、愛奈の横にもう1人立っていた。
玲「あ、織月さんが愛奈の部活仲間だったんだ」
織月さん「うん、よろしくね♪」
俺が話しかけると、織月さんは笑顔で対応してくれた。
か、かわいい。流石クラスで1番のマドンナだ、、。

中古店…

玲「、、」
玲は取り敢えず、販売されている武器や機体本体のパーツに全部目を通している。そしてその光景を2人は確認する。
織月さん「星空さん、とてもガンダムが好きなんだね」
愛奈「そうだね、学校から帰るとすぐGBMにログインするみたいなんだよね」
織月さん「フフッ、私の兄さんみたい」

愛奈「明日人君だね」
織月さん「うん、そしていつも遊んでくれて、戦い方を教えてくれて、甘えさせてくれたりもするの」
愛奈「咲月ちゃんって本当に明日人君が好きだよね♪」
織月さん「う、うん、、、、、大好き、、」
最後の「大好き」は小声過ぎて、愛奈には聞こえていなかった。しかし表情で察せられる。

その頃の玲…

玲「ザンライザー、、、ＧＮ―Ｘを加工して接続できたとしても厳しそうだな」
ＧＮ―Ｘをどのように強化するかは未だに定まっていない。
玲「う～ん、、、やっぱりこれかなぁ」
玲は３０機セットのＧＮファングを手に取った。
玲「これをＧＮ―Ｘに１０個くらい付ければ有利に動けそうだ」

帰り道…

３人は薄暗くなってきた道を歩いく。
織月さん「すっかり暗くなっちゃったね」
愛奈「そうだね、時間が経つのは早いな～」
玲「また今度行こうよ、次は明日人も連れて」
織月さん「うん、そうだね、、」
心なしか、織月さんの声のトーンが下がった気がする。
愛奈「明日人君に何があったの？」
織月さん「それは、、、」
織月さんが困っている。あまり言いたくなさそうだが、、、。
愛奈「明日人君、いきなり眼帯を付けだしたし、何か大きなことに巻き込まれたんじゃないのかって思って」
玲「お、おい、あまり聞いてやらない方がいい気が」

織月さん「ううん、大丈夫。明日人はＶＲの中で襲われて重症を負ったの。左目と、体の所々、、、」
愛奈「、、、グラハム、エーカー、、、！」
織月さん「、、、っ！、うん。知ってたのね」
玲　「まじか、、、」
信じられない、、けどよくよく思い返せば、確かにグラハムさんも左目に眼帯をしてた。
織月さん「最後の最後で重い空気にしちゃったね」
愛奈「ううん、大丈夫！明日人君を支えてあげられるのはきっと咲月ちゃんだけだから、元気出して！」
織月さん「うん、ありがと♪」
玲　（良かった、いつもの明るい表情になった）
織月さん「２人共ありがとう、また学校でね♪」
玲　「あぁ、またな」
愛奈「バイバイ♪」
挨拶を交わし、織月さんと別れた。
玲　「愛奈は凄いな。俺なんか何て言ってやればいいか分からなく、、、」
愛奈「、、、」
玲は愛奈に話しかけるも返答が来ない。
玲　「愛奈？」
愛奈「あ、ごめん。頭に変な違和感がね」
玲　「ふぅん、きっと疲れてるのかもな。家までついてってやるよ」
愛奈「うん、ありがとう」
こうして玲は愛奈を家まで送り届けた。
愛奈（なんだろう、いきなり明日人君の声？が、、、）

第3話「求め過ぎて」

ＧＢＭ、ロビー…

フェンはオンライン対戦一覧に目を通しながら今日の出来事を思い出している。

織月さん「明日人はＶＲの中で襲われて重症を負ったの。左目と、体の所々、、、」

愛奈「、、、グラハム、エーカー、、、！」

織月さん「、、、っ！、うん。知ってたのね」

玲　「まじか、、、」

フェン「重症を負ってまで、勝ったのか、、、？、、、っ！」

一覧表の1番下に、今1番会いたい人物のキャラネームを見つけた。グラハムだ。

フェン「気の毒だが、勝つ秘訣を聞きたいな」

ミア　「勝つ秘訣は、守りたいものを命を賭けてでも守ることだよ」

フェン「なっ！」

ポチッ

グラハムの項目を押すと同時に背後から話しかけられた。

フェン「み、ミアか、、、びっくりさせるなよ」

ミア　「ねえ、私も一緒に行かせてよ」

フェン「あ、あぁ、でも大丈夫か？グラハムは一度ランキングにも載ったんだろ？」

ミア　「分かってる。それに、今の私なら勝てるかもしれない」

フェン「？」

疑問に思っていると、出撃準備フェーズに切り替わる。

フェン（何か策があるのか?だけど、いくらなんでもザクが核エンジン搭載型に勝つのは、、）
ミア　「行くよ」
フェン「お、おぅ」
ステージは宇宙。ミアのブレイズザクファントムが出撃し、その後にフェンのＧＮ―Ｘが出撃する。
フェン「、、、あそこか」
衛星も何もないない宙域で機体が２機視認できる。向こうもこっちに気づいているだろう。
ミア　「グラハムの機体、太陽炉搭載型になってるわね」
ミアの言うとおりにグラハムのクアンタの背を見てみれば、デスティニーの翼からエクシアリペアⅣの背に換装されている。
フェン「こっちにだってアヴァランチの装備がある」
ミア　「っ!避けて!」
フェン「っ?分か、、ッぅお!」
回避行動をとると、２機の間に大型粒子ビームが通り過ぎる。発射された方向をモニターのズームで見ると、フルセイバー装備のゴールドフレームがＧＮランチャーを構えていた。
フェン（どうして分かった、、？）
ミア　「グラハムならこうしてくる、、フェンの方にグラハムが来るよ!」
フェン「分かったよ!アストレイはやれるか!?」
ミア　「言われなくても!」
ミアはザクファントムの両肩の盾からビームアックスを２つ取り出し、二刀流で攻める。
フェン「ミアに何が?、、、チッ、来た!」
前方に視線を戻すと、グラハムのクアンタが機動防盾を構えながらフェンのＧＮ―Ｘに射撃する。それに合わせるようにフェンもＧＮビームライフルで応戦する。
フェン「前より速い、、、！」
グラハム「そこだっ!」

パシュッ！パシュ！
グラハムは機動防盾の裏に隠し持っていたＧＮベイオネットのライフルモードでＧＮ―Ｘの右肩とシールドの接続部を狙い撃つ。
バキッ！…
フェン「くそっ！」
ＧＮ―Ｘは右肩のシールドを失ったが、瞬時にそのシールドからビームジャベリンを取り出しクアンタに投擲する！
シュッ…ジャンッ！
命中はしなかったものの、ジャベリンをＧＮベイオネットで跳ね返そうとしたクアンタは、投擲力に耐えられず手からＧＮベイオネットが離れる。
フェン「少しでも怯んでる今が！」
グラハム「まだ武器はある！」
ＧＮ―ＸはＧＮブレイド（ショート／ロング）で突進し、クアンタは機動防盾を捨てＧＮバトルブレイド２つで対抗する。
フェン「ここでグラハムに勝つ、、、！」
グラハム「良い気迫だ。けど、まだ足りないぞ！」
ガキンッ！ザンッ！
フェン「くっ!?」
グラハムはＧＮバトルブレイドごとＧＮ―Ｘを突き放し、取り出し速度の速いＧＮビームサーベルを右手に装備すると、一気に振り下ろしＧＮ―Ｘの左腕を切断する。
フェン「まだだ！トランザム！」
ＧＮ―Ｘはライフルを捨てると赤く輝き、ＧＮソードを装備して接近戦を試みる。
グラハム「トランザムッ！」
負けじとクアンタもトランザムを発動する。
グラハム「フリングエッジ！」
ＧＮビームサーベルを収納すると、両腰に装備しているＧＮブレイド（ショート／ロング）を投擲する。
フェン「うっ！」

フェンはＧＮ―Ｘの足首を犠牲にしながらも突撃する。それに対し、グラハムはＧＮバトルソードを両手に装備し受け止める。
グラハム「これならまた勝て、、、っ！」
鍔迫り合い中、もう一つの戦いに目が入った為、クアンタに蹴りを入れられ行ってしまう。
フェン「ま、待て！」
機体が損傷していながらもフェンはクアンタを追う。

同時刻、ミアの戦闘終了直後…

エディ「なんて反応なの、、、？」
エディのゴールドフレームは両腕が破損しており、コックピットハッチが破壊され内部がむき出しになっている。
ミア「これで、勝負ありね」
ミアのブレイズザクファントムは、両肩のシールドをパージしただけでほとんど無傷だ。
エディ「最近どうしたの？良い事だけど凄く強いじゃない！」
ミア「そ、それはね、、」
ビューンッ！
２人の目の前に緑色のビームが通り過ぎる。
ミア「来たわね」
ミアはザクの両手に持っていたビームトマホークを連結させ短めの薙刀状にし、空いた左手にゴールドフレームが手放したＧＮガンブレイドを装備し迎え撃つ態勢を取る。身構えた相手は、トランザム継続中のクアンタだった。
グラハム「仇は取らせてもらう！シールドスロー！」
グラハムは急行中に回収した機動防盾をザクに投擲する。
ミア「ふっ、、、！」
ザンッ！
投擲された機動防盾をミアは避けようとせず、ビームトマホークで別方向へ弾き返した。

グラハム「トランザムも相まってかなりの速度のはずなのに！」
ミア　「あなたの動きなら分かる！」
パシュッ！パシュッ！パシュッ！
ミアはトランザム中のクアンタに対し、ＧＮガンブレイドで射撃する。その撃った３発は全て、トランザム中のクアンタに命中した。
グラハム「うわっ！当てられた!?」
フェン「そこだ！」
グラハムがザクの攻撃で怯んでいると、背後からフェンがＧＮソードで迫る。
グラハム「まだだぁ！」
ザシュッ！
フェン「うっ、、、！」
グラハムは左手のＧＮバトルソードでＧＮ―Ｘの右胸部を突き刺す。するとＧＮ―Ｘのトランザムが終了した。
グラハム「味方がここにいれば撃てないだろ！」
バチッ！
ミア　「くっ、、、！」
左手を離さずに右手のＧＮバトルソードでフリングエッジを発動し、ザクの左肘を切断した。ザクに命中したのを確認すると、クアンタのトランザムも終了した。
フェン「また、、勝てないのか、、、？」
グラハム「、、、っ！」
クアンタは肩を変形させ、空いた右手を輝かせるとＧＮ―Ｘの胸部を掴んだ。
グラハム「必殺ッ！シャイニングフィンガーッ！」
輝いた右手はさらに輝き、ＧＮ―Ｘを爆破した。
ミア　「勝つ秘訣を教えてあげたのに」

第４話「勝ちたければ」

ＧＢＭ、宇宙領域…

フェン「また負けちまった、、」

フェンは観戦ロビーでミアとグラハムの戦況を見ている。今はスーパーモードのクアンタと動きの読み合いをしているようだ。

ミア「フェン、また負けっちゃったね～」

フェン「うるせぇよ、、」

ミア「グラハムの強さ、見せてあげようか？」

フェン「は？」

そう言うとミアは中破したゴールドフレームにハンドグレネードを投げる。

フェン「お、おい、、！」

ミア「大丈夫、グラハムならね」

ドオオンッ!!……

投げたハンドグレネードが爆発した。

フェン「これは流石に助からないだろ」

ミア「守られてなければね」

フェン「は、まさか、、」

ハンドグレネードの爆風が収まっていき、黒煙の中から影が見える。その影は黒煙をＧＮ粒子で吹き払った。この宙域で動ける敵機は当たり前だが1機しかいない。

ミア「ね？グラハムが守ったでしょ？」

フェン「トランザムのクールタイムはまだ回復しきってないのにか、、、？」

ミア「グラハムは仲間の為に力を残す癖があるの」

フェン「それが、、、勝つ秘訣、、？」

ミア「確信がある訳じゃないわんだけどね。でも、グラハムなら、、」

話している間にトランザムの切れたクアンタが動く。今度はＧＮタチを構えての攻撃だ。接近してくる間にビームトマホークを分離させておく。
ミア　「、、、この角度ね！」
クアンタのＧＮタチを、右手に持つビームトマホークで重量に任せて左に弾いた。
ミア　「武器を手放させる！」
続いて左手に持つビームトマホークで右に弾く。するとミアの宣言通り、クアンタはＧＮタチを手放した。
フェン「すげぇ、、、」
ミア　「まだよ！」
ＧＮタチを手放したクアンタは即座にＧＮビームダガーを２本取り出し、ザクに仕掛ける。
ザシュッ！
ミア　「はぁぁぁ！」
胸部にビームダガーを刺されながらも、ザクの姿勢を前屈みにし、誘導ミサイルをなるべく至近距離で発射する。
ドゴッドゴッドゴッドオォン!!…
誘導ミサイルはザクファントムの腰部のハンドグレネードをも誘爆させ、機体状況は最悪に陥った。
ミア　「はぁ、はぁ、はぁ、、」
フェン「なんて戦いだ、、、流石にグラハムも、、、っ!?」
クアンタが墜ちたと思ったのも束の間、誘導ミサイルの黒煙からビームサーベルが突き出ると、ザクファントムのコックピットを貫いた。
ミア　「フフッ、お手上げね」
黒煙が晴れると、左腕や右目部分などが損失したクアンタが姿を表す。
ＧＢＭ、ロビー…

グラハム「対戦ありがとう。まさかザクであそこまでやるなんて思いもしなかった」
ミア「私達もグラハムと思いっきり戦えて良かった！そうだ、フェンに強くなる秘訣を教えてあげてほしいの」
グラハム「強くなる秘訣、、？んん～、、、」
フェン「よろしく頼む、、！」
グラハム「、、、君が望むような答えは出せないと思うけど、強いて言うなら、大切なものを守りながら戦うことかな」
おぉ、ミアの言ったことと同じだ。
ミアの顔を見てみれば、「ほらね」と言わんばかりにドヤ顔をしれいる。
なんか一発殴りたくなる顔だ。
フェン「大切なもの、か、、、分かった、ありがとう」
俺の大切なものは何なのか、、、また今度考えることにしよう。
グラハム「力になれたならいいよ。あ、それとミア」
ミア「何？」
グラハムは一瞬迷ったような素振りを見せるが、改めてミアの顔を見る。
グラハム「君に動きを見られてたような戦いだった、またバトルしよう」
ミア「え、えぇ」
エディ「明日、、、グラハム、何言ってるか分からないわよ」
グラハム「あぁしまった、つい思ったことを言っちゃった、、、と、とにかく、今日は落ちるよ！」
エディ「私も落ちるね。また明日！」
そしてグラハムとエディさんはログアウトした。
フェン「グラハム、不思議な奴だな。でも、強さの秘訣がヒントになったような気がする」
ミア「、、、」
ミアから返事がこない。様子を伺うと、また何か考え事をしているようだ。

フェン「ミア」
ミア「ふぁ、ふぁい！」
フェン「情けない声、、、また何か考えてたけど、なんかあるの？」
ミア「うぅん、、、きっと話しても信じないでしょ？」
フェン「珍しいな、お前が正直に話さないなんて。大丈夫、信じるからさ」
いつもならすぐからかって正直なこと言うのに。
ミア「じゃ、じゃあ、、、」
ミアは少し下を見ながら話す。
ミア「グラハムの言ってた、『動きを見られてたような戦いだった』って、あれ、、、本当なの」
フェン「???」
待て、え、動きをいちいち先読みしながら戦ってた？そんなことが可能なのか？
ミア「もう、、、やっぱり信じてない顔よ」
フェン「あっ悪い、顔に出ちゃったか。でもなんか、ミアなら本当にやりかねない気がする、うん、なんとなくだけどな」
ミア「ん、、、馬鹿にされてる気がする」
ミアが正直に話してくれた後、２人もログアウトし就寝した。

深夜、ミアの部屋…

ミア「はぁ、、、うっ、頭痛が、、、っ」